

# 現存の確認されたフィルム（部分）による昭和 9 年 『不思議の國のアリス』翻訳字幕の調査

木下信一

はじめに

パラマウント社が 1933 年に公開した映画 *Alice in Wonderland* は翌昭和 9 年に字幕付き上映で日本公開された。『不思議の國のアリス』と題されたこの映画の字幕を訳したのは、字幕翻訳の草分けの一人、清水俊二（1906-1988）であった（木下 2006）。ただ、当時の清水による翻訳がどういうものかについては、当時の雑誌記事に、翻訳字幕を引用したのが見られず、また、当時のパンフレットでは、登場人物名などに通常の訳と違うものがあるが、翻訳字幕に因ったものであるかが判らない状態であった。

今回、部分的にはあるが『不思議の國のアリス』のフィルムが残っていることが確認された。本稿ではそのフィルムを調査し翻訳字幕の特徴を以下の点より確認する。

- ・ 文字遣いの特徴
- ・ 字幕の長さ／字幕の量
- ・ 登場人物名の訳語：Mock Turtle について
- ・ 言葉遊びの翻訳
- ・ 先行訳の影響

なお、本調査の対象であるフィルムは神戸映画資料館の提供によるものであることをここに記す。

現存フィルムとその来歴

フィルムの所有者でもある神戸映画資料館・安井喜雄館長にフィルムの来歴をうかがった。もともとこのフィルムは埼玉県の映画コレクター A さん（仮名・故人）より購入したもので、購入時期は 1970-80 であるとのことであった。もとの所有者が故人であることから、このフィルムの来歴についてはこれ以上判らなかつた。

推測される現存フィルムの由来

フィルムは映画上映のものとおなじ 35mm フィルム 1 巻で収録時間は 6 分弱。本編の上映時間が約 90 分で、フィルムが全 8 巻であることを考えると、フィルム 1 巻の半分の長さが残されていることになる。場面はアリスが Mock Turtle に出会うところから、トゥイードルダムとトゥイードルディーに出会うところまで。フィルムを見ると

同一カット内でフィルムを継いだ跡があるが、音声は飛んだように感じる部分はなく、そういう部分で切り取られたフィルムは1コマか2コマ程度ではないかと推測される。フィルムは冒頭に3,2,1とカウントダウンタイトル、巻末に「The End」のタイトルが付されている。

フィルム開始部のカウントダウンタイトルも終端部のエンドタイトル



図.1



図.2

もそれぞれスプライシングテープにより本編フィルムに継がれている（図1, 2参照）。

なお、この映画は『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』を一つにまとめた映画であるが、裁判の場面がない。映画では Mock Turtle の場面のあと、グリフォンがアリスを連れて走り、その途中でグリフォンが赤の女王に姿を変え、鏡の国のチェス

の開始となる。また、原作で最初の二マスを飛び越す列車の場面は映画としてカットされている。そのため、上記の場面は約6分に収まる。現在発売されているDVDと比較しても、この場面でフィルムに大きなカットがされているようには見えない。

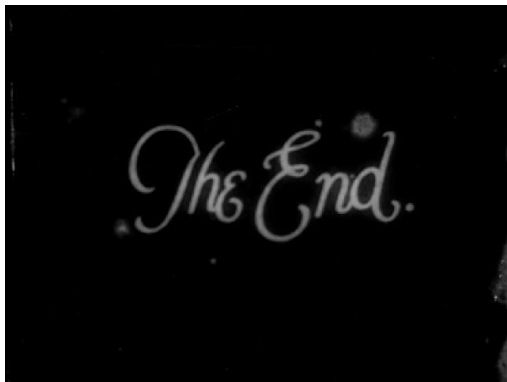


図.3

このフィルムのエンドタイトルを図3に示す。黒バックの中「The End」とある、単純なものだ、一方、DVDに収録されている、この映画本来のエンドタイトルは図4になる。この当

時の映画によく見られる、映画会社のマーク（ここではパラマウント）にオーバーラップした形で「The End」という表記だ。その後、キャストの短いエンドロールがつく。もちろん、当時は現在のような長大なエンドロールではない。この映画がアメリカでテレビ放映された際の録画が元と思われる、かつてブートレグ版として出回っていたソフトでも、この部分は同じであり、映画公開時からのエンドタイトルがDVDに収録されているものと



図.4

考えて間違いはない。

さて、このカウントダウンとエンドタイトルの状況から、このフィルムの由来が、次のようなものであったと考えられる。

カウントダウン、エンドタイトルが元のフィルムに継がれているだけであることから、本編中この部分だけを商品として新たに複製したものではないことがわかる。商品としての複製なら、どちらも一緒に一本のフィルムに焼き付けている筈。

エンドタイトルが本来のものと違うことから、この作業をしたのがパラマウントでないことがわかる。パラマウントがやっているなら、エンドクレジットは自社で持っている筈。

エンドタイトルが本来のものと違うことから、この作業をしている時、最終リールにあるタイトルを流用できなかったことがわかる。それは、最終リールが手許になかったとも考えられるし、最終リールも同じように切り分けられて、本来のエンドタイトルはそちらに使われたとも考えられる。

以上のことから、このフィルムがパラマウントではなく、映画館からの流出と考えられる。その流出過程について以下の可能性が考えられるが、どちらが正しいか断定はできない

- ・ 一つあるいは複数のリールが流出し、後に誰かがこのフィルムの頭と末尾にカウントダウンとエンドタイトルを継いだ。
- ・ 映画館で元の映画自体をどこかに販売。そこで各リールにカウントダウンとエンドタイトルを継いで、商品として流通させた。

流出した経路は不明であるが、いずれにせよ、このフィルムそのものはパラマウントが作った本物と考えて良いと思われる。

## 字幕における文字遣いの特徴

図5に字幕の一例を示す。この映画が昭和9年に公開されたことを考えると違和感を持つのではないか。字幕中、「本当」は当時なら「本當」、「亀」は「龜」、「だった」は「だつた」と書かれるのが正式な表記だからだ。これだけを見ると、この映画が戦後に再公開されて、字幕も新たに付けられたのではないかと思ってしまう。しかし、図6を見ると、「海亀」の「海」の字は旧字体で書か

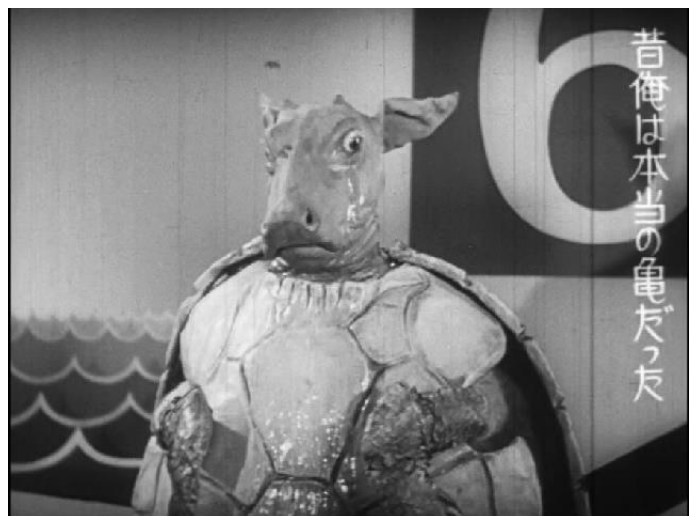


図.5



図.6

漢字については正字ではなく略字が多い。新字体で書いているように見えるのはそのためである。これは、字幕が手書きであることと見やすさを考慮したことによると思われる。

旧仮名遣いで書かれているが、促音(っ)や拗音(ゃゅょ)は文字を小さくして書いている。この表記は外来語では当時も使われていた仮名遣いであることから、これも字幕の見やすさを考慮したと思われる。



図.7

れており、「唄え」という部分も「唄へ」と旧仮名遣いで書かれている。図7を見れば、この字幕の特徴ははっきりする。

「二十銭」の「銭」の字が略字で記されているのだ。つまり、先に新字体で書かれているように見えたものは、略字体として書かれていたのだった。他の部分を含め、このフィルムの字幕の文字遣いには、以下の特徴がある。

### 字幕の特徴

このフィルムの字幕については、他にも現在の字幕とは違う部分が見られる。ここで、現在字幕翻訳を行っている太田直子による、現代の字幕の特徴を見てみよう。

字幕の制限字数の目安は「1秒=4文字」と言われている。これは人が1秒間に読み取れる字数の目安が4文字ということだ。(太田 2013、p.9)

一つの字幕は1行か2行。それ以上ということはない。(太田 2013、p.24)

縦書きの場合は1行10字、横書きなら13字が標準となっている。(太田 2013、p.24)

一方、昭和 9 年に『不思議の國のアリス』の字幕を訳した、当の清水俊二は、戦前の字幕の特徴をどう説明しているか。

(昭和 6 年『モロッコ』の字幕について：筆者註) 検閲台本に掲載されているスーパー字幕を今改めて調べてみると、特に目につくことが二つある。第一にスーパー字幕の数が少なすぎることで、第二に一つの字幕の字数が多すぎることである。(清水 1988、p.288)

当時の字幕づくりの考え方で字幕はできるだけ少なくということだったのである。(清水 1988、p.288)

あの当時は歌に字幕をつけないことがしばしばあった。(清水 1988、pp.289-290)

そのころは一行十字でなく、十三字だった。(清水 1988、p.291)

では、このフィルムの子幕を見てみよう。このフィルムに収められていた字幕は全部で 49 枚。1 枚の字幕の最大文字数は 35 文字 (スペース、「!」、「?」は 1 文字と数える。ダッシュ「—」、繰り返し記号「/」は 2 文字と数える。以下同じ)、最小文字数は 5 文字、平均 14.9 文字。一行 13 文字で最大行数 3 行であった。清水の示す戦前の字幕の特徴に当てはまっている。

また、字幕における省略の状況についても確認した。映画の台詞は DVD に収録されている SDH (Subtitles for the Deaf and Hard-of-hearing) を参照した。SDH を追いつながら実際の台詞を聴いてみたところ、実際に話されている台詞と SDH の間に違いは認められなかった。SDH を参照したところ、文あるいは詩の行が全部で 25、訳文では省略されていた。

略されているものの多くは、話の間の手や詩の繰り返し (に近い) 部分で、特に話の全体の意味が解らなくなるものはなかった。

省略の実例を表 1、表 2 に示す。仮名遣いは原文のままであるが、漢字は新字体に直している。以下、本稿における字幕の引用はこの方式で行う。

表 1. 省略の実例(1)

| 話者          | 字幕                    | 英文   |
|-------------|-----------------------|--|
| Mock Turtle | 学校は海の中さ 信じられまい<br>が—— | We went to school in the sea,<br>though you mayn't believe it. |
| Alice       | (省略)                  | I never said I didn't  |
| Mock turtle | (省略)                  | You did.   |
| Gryphon     | (省略)                  | Hold your tongue.  |

表 2. 省略の実例(2)

| 話者          | 字幕                            | 英文  |
|-------------|-------------------------------|---|
| Mock Turtle | 最上等の教育を受けたんだよ<br>毎日学校へ通ったんだから | We had the best of educations.<br>In fact we went to school every<br>day. |
| Alice       | (省略)                          | I've been to a day school, too.   |
| Alice       | 妾も学校で仏蘭西語と音楽習っ<br>たわ          | We leaned French and music.   |

また、Mock Turtle の歌う海亀ス  
ープの歌についても、台詞では 9 行  
歌われている詩のうち、字幕として  
訳されているのは 4 行のみで、  
「Pennyworths only of beautiful  
soup?」のリフレイン以降の歌詞は  
省略されている。

こうして見ると、一行あたりの文  
字数や最大行数、そして原文の省略  
等、清水の示す戦前の字幕の特徴を  
具えていることがわかる。この字幕  
が戦前に作られたものであることは  
確実であり、そこから、この字幕が  
清水の訳した、昭和 9 年封切り時の  
字幕であることも確実と考えられる。



図.8



図.9

### 登場人物名の訳語——Mock turtle について

図 8 は、今回発見されたフィルムの中に収録されている最初の字幕である。アリスにグリフォンが問いかける台詞は「海亀見たかね？」とある。次の字幕でアリスは「いゝえ 海亀って 一体何なの？」と問い返す。つまりこの映画では Mock Turtle は単に「海亀」と訳されているのだ。英語では mock turtle soup の材料だと解説し、言葉遊びであるとはっきり判る台詞も字幕では単に「海亀スープの材料さ」と訳されている。

図 9 に示すのは、映画『不思議の国のアリス』封切り時のチラシに印刷された登場人物一覧から

Mock Turtle を抜き出したものである。この登場人物一覧は、映画のパフレットともいえる松竹洋画の冊子『S.Y.』でこの映画が紹介されている号にも見える。ここでも人物の紹介が「海亀」となっていることに気づく。これは字幕を訳した清水がうっかり誤訳したわけではなく、敢えて登場人物の訳語を「海亀」としたことを示す。

清水は在米時代の 1932 年にブロードウェイで、この映画の元になったとも言えるエヴァ・ル・ガリエンヌのミュージカル劇 *Alice in Wonderland* を見ており、後述するように日本語訳でも『アリス』物語を読んでいる、言葉遊びとしての Mock Turtle について知らないということはある得ない。

ここで、Mock Turtle に関する映画の台詞と字幕を表 3 に示す。先に挙げたものも重複を恐れずに記載する。

表 3. Mock Turtle に関する台詞

| 話者          | 字幕              | 英文  |
|-------------|-----------------|---|
| Gryphon     | 海亀見たかね？         | Have you seen the Mock Turtle yet?                      |
| Alice       | いゝえ 海亀って 一体何なの？ | Why...Why, no. I don't even know what a Mock Turtle is. |
| Gryphon     | 海亀スープの材料さ       | It's what mock turtle soup's made from.                 |
| Mock Turtle | 昔俺は本当の亀だった      | Once I was a real turtle.                               |
| Mock Turtle | 先生は年寄りの亀で       | The master was an old turtle.                           |

字幕では Mock Turtle を「海亀」、turtle を「亀」と訳し分けていることが判る。「海亀」という訳語は、訳者が意味を解っていないというのではなく、字幕という字数の制限された環境では mock turtle soup の材料という言葉遊びが解らないと考えて、わざと「海亀」としたのだと考えるのが妥当であろう。字幕と本の訳文の大きな違いとして、本は訳語に引っかかったら前のページに戻ることや註を読むことも可能だが、字幕ではすぐに文字が消えて別の台詞がスクリーンに映っている、ということがある。上述の太田の記載にあるように、1 秒 4 文字で観客に理解させなければいけないのである。そこに、日本では全く馴染みのない海亀スープとその代用品の説明、そこから Mock Turtle という人物名が生まれたというような知識を盛り込めるはずがないし、ストーリーを楽しむことが出来るわけがない。文字の表記にすら見やすさを重視する必要のある字幕で、Mock Turtle の訳を正確に行うことは、無い物ねだりでしかないといえよう。

清水のその方針は徹底していて、映画公開時にこの映画について書いたエッセイでも、この場面を

と書いている。

## 言葉遊びの翻訳

現存フィルムに収められている部分にある、言葉遊びは以下のとおりである。

- ・ Mock Turtle の名前とその語源 mock turtle soup (既述)
- ・ 先生のあだ名
- ・ 海の底の学校の教科
- ・ 授業時間が毎日減ってゆくこと

これを清水がどう訳したかを見てゆくが、その前に別の映画で清水が英語の言葉遊びを日本語に訳した例を見よう。これは映画『カレッジ・リズム』(1934年)(日本公開:昭和10年9月)の中の一節である。

原文のやりとりが "I hate you! I hate you! I hate you!" / "Three hates makes twenty-four." とあるのに対し、訳文は「罰当たり! 罰当たり! 罰当たり!」 / 「三罰二十四や」と訳している ((清水 1988, p.126)。この映画が日本公開されたのは昭和10年であり、『不思議の國のアリス』日本公開の翌年だ。では、『不思議の國のアリス』では、どう言葉遊びが処理されていたか。

### 先生のあだ名

Mock Turtle が自分たちの先生をあだ名で呼んでいたことを話す場面について、字幕と原文での台詞を表4に示す。

表 4. Mock Turtle が話す先生のあだ名

| 話者  | 字幕                  | 英文  |
|-----|---------------------|---|
| 海亀  | 先生は年寄りの亀でスッポンで渾名だった | The master was an old turtle. We used to call him Tortoise. |
| アリス | 何故スッポンなの?           | Why did you call him Tortoise if he wasn't one?             |
| 海亀  | 顔が似て居た              | We called him tortoise because he taught us.                |

先にも触れたが、turtle を「亀」と訳している。それだけではなく Tortoise を「スッポン」と訳していることにも気づく。通常、「亀」といえば陸亀 (tortoise) を指し、一方、スッポンは英語で Chinese softshell turtle だ。そういう意味では、原文と訳文が入れ替わっているととれる。おそらくこの部分は、Mock Turtle を海亀、Turtle を



亀と訳したことから Tortoise も訳しわけの必要があったからであろうが、その理由に、この部分が言葉遊びであると清水が意識していたからであると考えすることは不自然でないだろう。ただ、実際の訳文は言葉遊びと判っていながらもごまかす形になってしまっている。

### 海の底の学校の教科

海の底の学校の教科づくしは、原作の中でも言葉遊びが最も詰まった部分といえる。ただ、映画では登場人物の会話で行われるため、動きに乏しい。そのため折角のキャロルの言葉遊びも大幅にカットされることになる。字幕の台詞を表 5 に示す。

表 5. 海の底の学校の教科

| 話者 | 字幕                            | 英文   |
|----|-------------------------------|--|
| 海亀 | ぐる／＼廻りや這ひずり廻りさ                | Reeling and writhing to begin with.  |
| 海亀 | それから色々な算術に 秘術に 奇術に 醜顔術に 愚弄術―― | And then the different branches of arithmetic, ambition, distraction, uglification and derision. |

概ね日本語の言葉遊びで処理されているといえる。

### 授業時間が毎日減ってゆくこと

原作の言葉遊びの一つであるが、Lesson (授業) と lessen (減る) の言葉遊びがこの眼目になる。表 6 に字幕の台詞を示す。

表 6. 授業時間数

| 話者    | 字幕                    | 英文   |
|-------|-----------------------|--|
| アリス   | 一日何時間勉強したの？           | And how many hours a day did you do lessons?                             |
| 海亀    | 最初の日は十時間 次は九時間と 段々減った | Ten hours the first day and nine the next and so on.                     |
| グリフォン | 毎日より一時間宛減る所に妙味がある ね   | That's why they are called lessons, because they lessen from day to day. |

どうであろうか。訳者がこの部分を言葉遊び、少なくともジョークであることははっきり理解していることは、訳文からも判る。しかし、どう日本語にするかという点になると、上手く訳せずにごまかしている、もっといえばジョークとして訳すことを投げかけてしまっているのが判る。

## 先行訳の影響

先に少し触れたが、清水は翻訳で『アリス』物語を読んでいた。

かんじんの原著リュイス・キャロルの『不思議の國のアリス』は読んでゐない。ただ、楠山正雄氏譯の邦譯で讀んだだけである。

(清水 1934)

ここでは、字幕翻訳に際し清水が先行訳である楠山訳の影響を受けていたのか、受けていたとすれば、どの版であるのかを、映画の台詞の原文、字幕、原作での対応する場面での楠山訳を比較することで確認したい。比較の対象としては、チェスの用語、先述の言葉遊びの部分と、海亀スープの歌を取り上げる。映画の台詞である以上、原作の地の文は省略されること、普通に訳すことの出来る一般的な台詞では、わざわざ先行訳を参照することはないと思われるからだ。一方、言葉遊びの処理や詩の訳では、訳に工夫が必要であるだけに、先行訳を参照する可能性は高いと考えられる。当時、日本では一般的な遊びではなかったチェスの用語についても、既に日本語に訳した事例ということで、先行訳を参照する可能性は高い。

この映画が公開された昭和 9 年時点で刊行されていた楠山訳の『アリス』物語は、以下の通りである。

- ・ 1920 (大正 9) 年『不思議の國』(世界少年文学名作集) 第 9 卷「第一部「アリスの夢」第二部「鏡のうら」」家庭讀物刊行會 (精華書院)
- ・ 1930 (昭和 5) 年『アリスの夢 不思議の國 鏡のうら』(世界家庭文學全集 7) 平凡社
- ・ 1932 (昭和 7) 年『不思議の國 アリス物語』春陽堂少年文庫
- ・ 1932 (昭和 7) 年『鏡の國 アリス物語』春陽堂少年文庫

清水俊二は 1906 年生まれ。少年時代に読んだとすれば 1920 年版だが、字幕翻訳のために読んだとすればすべてが候補に入る。

## チェスの用語

表 7 に、鏡の國のチェスについてのアリスと赤の女王の会話を示す。なお、以降の楠山訳の引用においては、仮名遣いは原文のままであるが、漢字は新字体に直している。

表 7. アリスと赤の女王の会話

| 話者   | 字幕                         | 英文   |
|------|----------------------------|--|
| 赤の女王 | まるで将棋盤ね                    | It's all marked out like a chessboard.   |
| アリス  | 勿論将棋盤だよ 世の中も将棋盤さ お前は女王の歩だよ | Of course, it's a chessboard, and life is a chessboard and you are the Queen's Pawn.     |
| 赤の女王 | 四番目の駒へお行き 時間は少しもかゝらない筈だ    | You will go immediately to the fourth square, which you should reach in exactly no time. |

この中で、チェスの用語といえるのは chessboard, Pawn, square の三つだ。これを清水訳、楠山訳で比較してみる。

**Chessboard :**

日本語字幕：将棋盤

楠山訳（すべての版）：将棋盤

**Pawn :**

日本語字幕：歩

楠山訳（すべての版）：歩

**Square :**

日本語字幕：駒

楠山訳（すべての版）：こま

すべての用語で清水訳が楠山訳と同じであることが判る。もっとも、chessboard と Pawn については判断に留保が必要だ。日本で一般的でないチェスに、日本でも解りやすい将棋の用語を当てはめるなら、誰が考えても「将棋盤」、「歩」と訳すだろうからだ。

しかし、square の訳のみは、そうではない。これはチェス盤の中の場所を示す単位となっているが、日本の将棋では「升」あるいは「升目」と呼ばれている。現在の多くの訳でも、この部分は「マス」と訳される。しかし清水はここで「駒」という訳語を当てている。これはおそらく「駒」の誤記、あるいは字幕のための略記ではないかと思われるが、通常、「駒」といえば、チェスのポーンやクィーン、キングといった、手にとって動かすものを指す。日本の将棋なら「歩兵」「王将」といったものだ。ここで square を「駒」としてしまうと、折角将棋になぞらえているのに見ている者が混乱してしまう。映画のフィルムの一コマ、二コマというところから清水がこの訳語を連想した可能性もないではないが、むしろ先行訳である楠山訳にこの訳語（「こま」）があったのでそれを採用したと考える方が自然であろう。この字幕翻訳について、清水が楠山訳を

参照したことはほぼ確実と思われる。

では、いくつかある版のうち、どの版を清水は参照したのであろうか。

### 先生のだ名

表 8 に、Mock Turtle が話す先生のだ名について、字幕と原文、該当する部分の楠山訳を示す。

表 8. Mock Turtle が話す先生のだ名

| 話者  | 字幕                          | 原文   | 楠山<br>1920 | 楠山<br>1930/1932                                  |
|-----|-----------------------------|--|------------|--|
| 海亀  | 先生は年寄りの<br>亀でスッポンで<br>渾名だった | The master was<br>an old turtle.<br>We used to call<br>him Tortoise. | 該当訳文なし     | 先生はおぢいさ<br>んの海亀でね。私<br>たちは陸亀先生<br>といつてゐたも<br>のだ。 |
| アリス | 何故スッポンな<br>の？               | Why did you call<br>him Tortoise if<br>he wasn't one?                | 該当訳文なし     | なぜ海亀なのに<br>陸亀なんて名を<br>つけたの。                      |
| 海亀  | 顔が似て居た                      | We called him<br>tortoise because<br>he taught us.                   | 該当訳文なし     | なぜつておかが<br>め奉る大先生ぢ<br>やないか。                      |

1920年版の楠山訳の「該当訳文なし」というのは、この会話のくだりを楠山が訳文からすべて削除しているからだ。また、清水訳が「スッポン」と訳している Tortoise を楠山の 1930/1932 年版では「陸亀」と訳していることにも注目すべきである。

### 海の底の学校の教科

表 9 に、海の底の学校の教科について字幕と原文、該当する部分の楠山訳を示す。

表 9. 海の底の学校の教科

| 話者 | 字幕                                       | 原文  | 楠山<br>1920                             | 楠山<br>1930/1932   |
|----|--|---|--|---|
| 海亀 | ぐる／＼廻りや<br>這ひずり廻りさ                       | Reeling and<br>writhing to<br>begin with.   | ぐる／＼まはり<br>だの、這ひずりま<br>はりだのが第一<br>なのさ。 | まづ第一に、よろ<br>めき方とあがき<br>方。   |
| 海亀 | それから色々な<br>算術に 秘術に<br>奇術に 醜顔術<br>に 愚弄術―― | And then the<br>different<br>branches of<br>arithmetic,<br>ambition,<br>distraction,<br>uglification and<br>derision. | それからいろ／<br>＼な算術に――<br>秘術に、奇術に、<br>醜顔術。 | それから算術の<br>四則――すなは<br>ちいぼるな止せ<br>算に、風を引き算<br>に、べそかけ算<br>に、からかはれ算<br>です。 |

Reeling and writhing については、1920 年版とほぼ同じ、算数の四則についても 1920 年版とほとんど同じで、清水訳には「愚弄術」が追加されて原文通りに四つになっている。ここで注目すべき点は、この部分の訳について楠山訳では 1920 年版と 1930 年／1932 年版では全く違っているという点だ。

### 授業時間数

表 10 に、授業時間数が減る言葉遊びについて字幕と原文、該当する部分の楠山訳を示す。

表 10. 授業時間数

| 話者    | 字幕                       | 原文  | 楠山<br>1920 | 楠山<br>1930/1932                     |
|-------|--------------------------|---|------------|-------------------------------------|
| グリフォン | 毎日一時間宛減<br>る所に妙味があ<br>るね | That's why<br>they are called<br>lessons,<br>because they<br>lessen from day<br>to day. | 該当訳文なし     | だから時間割<br>さ。割れば割る<br>ほど数が小さく<br>なる。 |

先に見た先生のあだ名同様、この部分も楠山訳の 1920 年版では、この言葉遊びに至る会話ごとカットされている。

さて、ここで言葉遊びとして挙げた三つの場面を見てみよう。清水訳で日本語の言

葉遊びとして処理されている部分は、楠山訳の 1920 年版に訳が存在し、訳文がほぼそのままであるのに対し、原文の言葉遊びを誤魔化して日本語にした部分は、楠山訳 1902 年版では省略されている部分であることが判る。一方、1930 年／1932 年版の楠山訳と比較した場合、これら三つの場面の訳は、楠山訳とは全く違う文となっている。

ここまでの、清水訳が言葉遊びや詩の訳について、楠山訳に多くを負っていることが判る。特に、楠山の訳を参照できなかつた部分の訳について、辻褄を合わせる形でお茶を濁すことしかできなかつたという点からも、それがはっきりとしている。想像を逞しくするなら、この『不思議の國のアリス』の字幕翻訳の経験があつたからこそ、翌年の『カレッジ・リズム』でオリジナルな言葉遊びの翻訳を字幕にすることができたのかもしれない。

### 海亀スープの歌

最後に、海亀スープの歌の訳文を比較する。表 11 に字幕と原文、該当する楠山訳を示す。

表 11.海亀スープの歌（本文中「／」は改行、「|」は字幕の区切り）

|                 |   |
|-----------------|---|
| 字幕              | おいしいスープ魚も要らない   鳥も要らない何も要らない   たった二十銭のおいしいスープ   他の御馳走 何にも要らない   |
| 原文              | Beautiful soup/ Who cares for fish   Game, or any other dish?   Who would not give all else for two   Pennyworths only of beautiful soup? |
| 楠山<br>1920      | おいしいスープ、魚も要らない、／鳥も要らない、何にも要らない。／<br>たった二十銭のおいしいスープ。／これさへあれば何にも要らない。   |
| 楠山<br>1930/1932 | おいしいスープ、魚も要らない、／鳥も要らない、何にも要らない。／<br>二銭だけでものめたらうれしい。一銭だけでもおいしいスープ。／これ<br>さへあれば何にも要らない。   |

ここでの楠山訳は 1920 年版と 1930 年／1932 年版で大きな違いは少ない。しかしその違いである **two pennyworth** を清水訳では「二十銭」としており、ここでも 1920 年版を下敷きに字幕を作成していることが判る。

### Mock Turtle の訳語

先に Mock Turtle について清水は、止まったり後戻りしたり出来ない字幕という特殊性のために、敢えて「海亀」と訳したと考察した。では、清水が字幕を作る際に参考にした楠山訳では、Mock Turtle はどう訳されているだろうか。1920 年版では「海亀賽き」、1930 年／1932 年版では「海亀賽」である。字幕という性質上、この楠山の訳語は使えなかつたのである。

### まとめ

現存の確認された 6 分弱のフィルムについて、以下のことが判った。このフィルムは昭和 9 年に公開された当時の真正のフィルムであり、それが映画館から流出したものと考えられる。その際、カウントダウンとエンドタイトルを付加し、一本で上映できるような形にしている。その後の経緯は不明であるが、1970 年代から 80 年代にコレクターより購入されたものが現在神戸映画資料館に保存されている。

フィルムに収録されている字幕の文字表記については、以下の特徴が確認された。文字遣いは原則旧かなであるが促音や拗音は小文字表記となっている。また、漢字の表記は略字を使用している。一つの字幕の最大文字数は 35 文字（3 行）で、現在と違い、一枚の字幕の最大文字数は多い。字幕の文字数は昭和 9 年当時の字幕の習慣に合致する。これにより、この字幕が清水俊二のものであることがはっきりする。

字幕の翻訳には、以下の特徴が見出される。Mock Turtle は単に「海亀」と訳されている。しかしそれは言葉遊びが解らないからではなく、字幕だと解りにくいという判断と考えられる。台詞の言葉遊びの部分はちゃんと認識されているが、それを誤魔化した訳になっていることが多い。

この字幕を、清水が読んだと証言している楠山訳の『アリス』物語を比較したところ、詩の訳と言葉遊びの訳は 1920 年版の楠山正雄の訳をそのまま踏襲している。言葉遊びを誤魔化している部分は、楠山訳で省略された箇所であった。このことより、清水がこの字幕を訳すに当たって、1920 年版の楠山訳を参考にしたことが、当時の字幕で確認された。

## 謝辞

本調査にあたり、資料を提供してくださった神戸映画資料館・安井喜雄館長に感謝します。また、安井館長への仲介の労をとって下さった岸本通彦さん、靱山幸士さんのお二人に感謝します。

## 参考・引用文献

映画『不思議の國のアリス』封切時チラシ 1934

太田直子『字幕屋のニホンゴ渡世奮闘記』岩波書店 2013

木下信一・昭和 9 年のパラマウント映画『不思議の國のアリス』『Mischmasch』2006; 8: 13-29

楠山正雄訳『不思議の國』〈世界少年文学名作集〉第 9 卷「第一部「アリスの夢」第二部「鏡のうら」 家庭讀物刊行會（精華書院）1920

楠山正雄訳『アリスの夢 不思議の國 鏡のうら』(世界家庭文學全集 7) 平凡社 1930

楠山正雄訳『不思議の國 アリス物語』春陽堂少年文庫 1932

楠山正雄訳『鏡の國 アリス物語』春陽堂少年文庫 1932

清水俊二「春の大作紹介 不思議の國のアリス」『新映画』昭和 9 年 3 月号 40-45

清水俊二『映画字幕（スーパー）の作り方教えます』文春文庫 1988

DVD

Joseph L. Mankiewicz and William Cameron Menzies 脚本 *Alice in Wonderland* (Universal) \*英版

A Research on a partly-remained film of *Alice in Wonderland* (1933): How the Japanese subtitle was translated.

Shinichi KINOSHITA

The Japanese subtitle of the Paramount film, *Alice in Wonderland* (1933), released in Japan in 1934 and is partly remained only for about 6 minutes, is discussed mainly on how word plays were translated into Japanese by the translator, Shunji Shimizu.

For example, 'Mock Turtle' is translated plainly into 'Umigame' (Turtle) without any translation of the word, 'Mock.' Shimizu does not explain why he avoided translating the word. It might be because he thought it would take too much time and effort to explain the historical background of the 'mock turtle soup.'

Shimizu sometimes replaces Carroll's word plays into totally different Japanese word plays. And sometimes he does not translate them at all. It has turned out after all that Shimizu's translations and selection of word plays in the subscription of the film are exactly the same as the ones in two *Alice* books translated and published by Masao Kusuyama in 1920, which Shimizu had already read when he wrote the subtitles.